かささぎ 通信 第55号

2017年4月14日　発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　　「森三郎の作品を読む会」

二〇一七年三月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和10年12月号「あゝ眠い」昭和11年1月号「玉や」、8月号「病気」（いずれも初出作品、森三郎名義）を読みました。

「あゝ眠い」は、おかあさんとお姉さんがお芝居に行って留守の夜の話です。明日は学校があるからと、お芝居に連れて行ってもらえなかったみね子と弟の新一は、なかなか寝付けなく、トランプをして遊んだりしています。そのうちにいつか眠ってしまい、夢と現実の間を行ったりきたりする話です。『赤い鳥』昭和九年十二月号の「つまらない日」にも、女学校を出たお姉さんだけが音楽会に行くのを不満に思う女の子が登場していました。どちらも、大人の世界に憧れて背伸びをしてみる女の子の気持ちを描こうとしたのでしょう。

隣の鸚鵡が六大学野球の早慶戦の応援の真似をしたり、ねえやが毎朝ご飯をたきながら鉄道唱歌を初めからおしまいまで歌ったりと、三郎さんは、時局には触れずのんびりした時代の様相を描いています。

「玉や」とは、六年生の治の家の十五歳のねえやのことです。玉やは学校を途中でやめ、越後の田舎から出てきて、治の家に奉公しています。治が学校で習ったことを得意になって話したり、玉やを試したりすると、「勉強さへすれば自分だって・・」と想像します。読後に少し苦い後味が残ります。『赤い鳥』昭和十年五月号の「牛公」にも、乾物屋に奉公しながら学校へ通う、年齢は少し上の同級生のことが出てきました（「かささぎ通信」第53号参照）。田舎から都会へ奉公に来ている子どもたちも多かった世情が分かります。

「病気」は、腸カタルで三週間前に入院した子供が、退院したら食べたいものを想像する話です。「ビフテキ、エビフライ、あんこ玉、バナナ、海苔巻、汽車弁、塩せんべい、岡野の最中、ゆで玉子、クリーム・チョコレート、プリン、サンドイッチ、永藤の渦巻パン、シュークリーム、焼そば、メロン・・・」昭和十一年は、もうと言うか、まだと言うか、子どもがこんなにもいろいろな食べ物を想像して並べられる時代だったのですね。「岡野の最中」とか、「永藤の渦巻パン」と、固有名詞がつく食べ物は、当時の東京の人ならすぐ分かる食べ物だったのでしょう。上野の「岡埜（おかの）」の名前が付く和菓子屋さんに問い合わせたところ、戦争でほとんどが焼けて史実を裏付けるものは何も残っていないので、その店の最中なのかは分からないが、最中が人気で、泉鏡花がその最中を気に入っていたため、いまでも鏡花と名づけた最中を製造販売しているという回答をいただきました。

鏡花といえば、森銑三さんは二十四歳（大正八年）の頃ある団体の機関誌「帝国民」の編集に携わっていた時、泉鏡花のことを教わり、それから自ら鏡花党と称すくらい鏡花に親しんでいたようです。三郎さんも子どもの頃からの『赤い鳥』を中心とする読書の積み重ねに加え、川上児童楽劇団を辞めた後、二十歳（昭和六年）の頃からはお兄さんの銑三さんの家に居候させてもらっていたそうですから（かつおきんや著『「ごん狐」の誕生』P109）、お兄さんやその友人たちからの影響を受けて、さらに読書の幅は広がっていったのではないでしょうか。

次回予定　平成29年5月12日（金）午後1時～3時
『赤い鳥』昭和11年10月号（鈴木三重吉追悼号）の森三郎作品

お知らせ

第5回「森三郎に親しむ集い」
とき：平成29年　5月28日（日）　午後1時半～3時
開場　午後1時　入場無料；予約不要
ところ：刈谷市中央図書館　3階　大会議室　（200席）